

## 第 35 回電気通信普及財団賞 表彰者コメント ～テレコム社会科学賞～

< 順不同 >

※当論文賞受賞時の所属を記載しております。

茂垣 昌宏 氏（慶應義塾大学 大学院法学研究科 研究員）

テレコム社会科学賞 入賞

「Understanding governance in contemporary Japan: Transformation and the regulatory state」



この度は、拙著が名誉ある「第 35 回電気通信普及財団賞テレコム社会科学賞 入賞」に選ばれましたことにつきまして、誠に光栄なことと存じます。審査にあられた先生方、電気通信普及財団の皆様方、加えてこれまで御協力を賜りました皆様方に心からの感謝の念をお伝え致します。

拙著は、情報通信が大きく動き出した 1980 年代から現在に至る期間を対象に、情報通信を通じて国家の変容という大きな文脈を念頭に置きながら、日本のガバナンスを明らかにするという構想の元、情報通信規制を正面に据えて、これを他の規制分野である独占禁止分野と比較しつつ検討分析を行った研究です。情報通信分野は、これまで村松岐夫先生、飯尾潤先生、Steven K. Vogel 先生といった著名な碩学の先生方の業績を含め多数の政治分析が行われてきた重要な分野です。拙著は、これら諸研究に新たな視点と情報を加えることを目指しております。今後の情報通信の研究に対し何等かの貢献となることができたら、著者としてこれ以上の喜びはありません。

今回の受賞を励みに、情報通信の更なる発展とそのための政治分析、行政研究の深化を目指し、全力で取り組んでまいります。末尾ながら、電気通信普及財団並びに関係の皆様方の益々の御発展を心より祈念し、結びの挨拶とさせていただきます。

田中 克昌 氏（日本経済大学 経営学部 准教授）

テレコム社会科学賞 奨励賞

「戦略的イノベーション・マネジメント」



この度は、テレコム社会科学賞をいただき大変光栄です。改めて御礼申し上げます。

私は約 20 年間、日本電気株式会社(NEC)において経営企画職として勤め、電機業界にかかわってまいりました。

当該研究を始めたのは、今から約 7 年前でした。NEC で勤務しながら修士 2 年、博士 3 年の研究生活を送り、博士(経営学)の学位を取得しました。この間、中小企業診断士の資格も取得し、恩人・仲間との出会いや、タイミングに恵まれた大変充実した日々を送りました。

博士学位を取得した 2 年前からは、念願が叶い、サラリーマンから大学教員へと転身し、現在は、准教授として経営戦略論、イノベーション論を中心に、教育・研究活動において大変充実した生活を送っております。

本書には、博士論文における研究活動の成果と、電機業界における実務経験を集約いたしました。書籍化にあたり、主要な事例企業を匿名化するなど、博士論文から一部の内容を変更したものの、主にイノベーションの理論と、業界の実態を踏まえてイノベーション・マネジメントについて提言いたしました。

私の研究者としての人生は始まったばかりですので、研究活動を奨励いただく主旨の賞は、大変励みになります。選考委員の先生方に改めて感謝を申し上げるとともに、恩師の井上善海先生、当該賞への応募を薦めていただいた松島桂樹先生、中央経済社の納見編集長、そして、私の研究活動を支えてくれた妻や家族に、心より感謝申し上げます。

広田 すみれ 氏（東京都市大学 メディア情報学部 社会メディア学科、  
東京都市大学 大学院環境情報学研究科 教授）

テレコム社会科学賞 奨励賞

「5人目の旅人たち - 『水曜どうでしょう』と藩士コミュニティの研究」



この度は、「第 35 回電気通信普及財団賞テレコム社会科学賞 奨励賞」を賜り、誠にありがとうございます。一見柔らかいこの本を学術書として評価して頂いたことについて、関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

拙著は俳優・大泉洋を世に出したテレビ番組、『水曜どうでしょう』（HTB 北海道テレビ）のファン（藩士）コミュニティがなぜできたのかを社会心理学の観点で、主にファンへのインタビューから検討したものです。

ウェブ普及期に放送されたこの番組は、お笑いバラエティながら多くの興味深い点があります。’02年にレギュラー放送を止め、不定期の新作放映と従前の放送を再編集したDVD販売や他局への番組販売へシフトして18年、今なおロイヤルティの高い熱心なファンが全国に多数います。’00年という早い時期にウェブに掲示板を作り、そこを舞台に制作者と視聴者は双方向で親密なコミュニケーションを交わし、このことが多くの番組で失われつつあった視聴者間での共感の共有を維持、今でいうファンベースに相当する方法でビジネス上の大成功を収めました。このことはコミュニティ形成の基礎になっています。

特に私が関心を持ったのは、番組を見て笑うことで震災始め様々な人生のクライシスから立ち直り、番組に感謝する多くのファンの存在です。この「レジリエンス効果」についてはインタビューと実験から検討しました。ウェブ時代の動画ビジネスを先取りするような番組と、番組と繋がろうとし、またお互いも熱心に集う真面目な生活者の藩士たちの関係を、心理学の視点で検討し記録したいというのが執筆の主な動機で、その過程で多くの心理的要因を指摘できたと考えています。

番組の藤村・嬉野両ディレクターにはご支援頂きましたこと、また多くの藩士の皆様には研究にご協力いただいたことに深く感謝します。私はこの本を、番組を大切に思う人たち、中でもクライシスから立ち直った人達に読んで頂きたいと思って書きました。難しい企画を引き受けてくれた慶應義塾大学出版会にもお礼申し上げます。最後にテレビ研究者でもあった恩師岩男壽美子慶大名誉教授への感謝を記しておきます。先生は一昨年一月に急逝、残念ながら本書の感想は聞けませんでした。生きていればきっと受賞をとっても喜んで下さったのではないかと思います。

受賞を機に、さらに多くの人にこの番組とファンのこと、そしてテレビという媒体の可能性を知って頂けたらと思います。